
e uncanny valley of artificial intelligence

Awakevening

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

The uncanny valley of artificial intelligence

【Nコード】

N7611Y

【作者名】

Awakevening

【あらすじ】

みんな誰もが経験したこと

Sweet sixteen girl

湿り気のある土を、疎らに割れた瓦が夥しく覆っている。しかし、宵からの雪により、今はその多くが隠れてしまっていて見えない。その中で、一筋の堀建て柱だけが、その土地のかつての姿を踏襲するように、白く立ち尽くしている。

ここはどうも家屋であつたらしいが、小綺麗に整つたこの一角が、さながら夢の島のようなそれを許すとは思えない。

ここを通りすぎるだけの僕に真相は知る由もないが、とにかく奇妙な光景に間違いなかった。

立ち止まる僕を、期せず見慣れない制服が追い越した。

女だった。白い蒸気を上げながら、何やら携帯電話で話し込んでいる。

カーデイガンを着ているため、どの学校の生徒かは分からなかったが、背丈や骨の秀でた顔立ちからして、おそらく高校生だろう。

融雪された路肩のみぞれを、鈍く光るローファーで踏みしめながら歩いている。

もちろん、それを疑う余地はなかった。

夕暮れ時に、駅前のこの道を通る女子高生など、あの瓦礫の山とは違い当たり前前の光景であり、いわば注目に値しないものに他ならなはずだ。

誰も気にとめるものはいない。気にしていないふりをしていなければならぬのだ。

The edge of glory

しかし、一種の怖いもの見たさというか、そういう感情が働いたのだと思う。のっぴきならない何かを白日のもとへ晒すためにも、僕は目線をそらすわけにはいかなかった。

女は携帯電話を切り、ふいに瓦礫の方面へ走り出した。今にも音を立てそうなくらい、蒸気を盛んに上げている。栗色のショートヘアが揺れ、赤熱した耳が見えた。

ここで僕は気づいたが、この現象はどうやら今日だけのことでないらしい。

得体の知れない熱気みたいなものにあてられた気がして、思わず目をやると、五人ほどの「連中」がすでにこちらへ視線を向けていた。どれもこれも炯々としたような具合で、少なくとも一介の通行人へ向ける視線とは到底思えない。

つまりこの誰かが、あるひとつのぼんやりとした事実を見抜き、疑っているのだ。

女はとうとう、瓦礫のさなかへと足を踏み入れていた。

他より少し低まった立地のそこは、むろん侵入のあとがあるはずもなく、今はまっさらの白い平地のようである。

膝上ほどのチェックスカートをなびかせ、その体はひとつひとつ軽快に、地面へ靴底の陰影を作り出していた。

You spin me round

誰もが目を疑った。

いや、実際にそうだったかは、女へ意識の大半を向けている僕には分からない。

でも、そうしないわけにはいかないはずだ。いよいよ尻尾を掴んだというか、そういう感覚があったと思う。

僕たちの抱く疑惑、僕たちの向ける視線は、それこそ死体に向けるような本能に起因する嫌悪や拒絶、好奇に他ならない。

そしていまこの好奇心が、おそらくは最高の山場を迎えるときなのだ。「あいつは何をやっているんだ？」と。

そんな中、女は瓦礫の中ほどで歩みを止め、しゃがみ込んだ。雪の中へ手をつ込み、何かを探っているようだ。

雪をかき分けるたびに、白い指が赤みを帯びていった。さすがに冷たいらしく、やけに整った顔立ちの端々を歪ませている。

そしてその何かを探り当てたようで、今度は周りの雪を隅へ押しやり始めた。

おそらく、瓦礫の中のある表面を雪から掘り起こしたいのだろう。もぞもぞと芋虫のような格好で作業に耽る姿は、ひどく醜悪に思えた。

Killing in the name of

そう、僕はこのあたりから、排他感情のような、女を完全に追いやりたい衝動に駆られていた。その原因を言葉で表すことはできないが、「完全に」なんだから、これは相当に強い気持ちで、しかもかなり非人道的な願望だ。

そしてこの気持ちは、その場に居合わせた全員に共通しているはずである。ふとした拍子に、全員がまくし立てるように女を侮辱するようなことがあっても何ら不自然と思わないほど、小さな通りの一角はある種の熱狂を見せていた。

どうしてって、それは決まっている。答えは紛れもなく、僕らの「疑惑」にある。

今になって思うと、証明する手だてもなかったのに、なぜあれほどあの女に熱中していたのか。僕には分からないが、悪い意味で人間らしい心理であることには間違いなかった。

そして女は掘り起こし、それは再び地表にその全貌を現した。

吉祥草の花だった。

季節外れに咲くそれは儚げに、お辞儀をするような角度で咲いている。真つ白な雪原に浮かんだ藍色は爽やかな印象で、冬のはじめの澄んだ、透明な空気によく映えていた。

女は愛しそうに眺め、満足げにひと息つくとゆっくり立ち上がった。スカートの端が小さく濡れている。

僕たちの中に、このとき明確な悪意が沸き上がった。

明確ではあるけど、やはりそれを表現することも僕にはままならない。

煩雑なのだ。生意気だと思ったし、ありえないと思ったし、なににより腹が立った。

そんな黒い感情が頭の中を駆け巡り、増幅しあい、いよいよ僕は興奮を抑えきれなくなっていた。

思い切り叫びたい。そしてあの女の胸ぐらを掴み、力いっぱいぶん殴ってやりたかった。手を痛めるかもしれないけど、それでもまだ足りなかった。

Just a hero

そのとき、遠心力を増すいっぽうであった僕の思考を途切らすかのように、どこか締めりのない、エンジンの排気音が聞こえてきた。サンバー…軽トラックであった。煤けて、灰色がかったその車体は、欠伸の出そうな速度で、大通りのほうからこちらへ向かっている。そうとう年期の入った、ぼろい車らしい。よく見ると、ヘッドライトのカバーは軽年劣化で黄ばみ、樹脂製のスポイラーにも、雨跡をなぞるような形の色落ちがついていた。

僕はそんな情けないがらくたを尻目に、いったんは大きく深く、長いため息をついたが、その後にすぐ、そのガラクタがとんでもない真似をしようとしていることに気づいた。

小路に入ったというのに、やけに加速している。もう欠伸を挟む間にはなさそうだ。運転手が気を失っているのだろうか。

そしてその高いスピードで、僕の方に向かってきていた。やはりこいつはもう、ただ直進する鉄くずのようで、路肩の金網にミラーを擦りつけているのもかわわず、まっすぐ向かってくることだけをしている。

女のほうを見る。もう雪原から出ようとしているが、この事態にはまだ気づいていない。

I a m L I L I

もしかして、こいつは、まさか……

そう思った頃、古びた鉄くずはもう僕の目前を猛スピードで通過していて、そこからは何もかもが、スローモーションのように感じられた。

敷地の前の排水溝をもろともせず、駆け抜け小さく浮遊したように見えた鉄くずは、さっきまでとほぼ据え置き of 勢いで雪原に突撃した。

そのまま、女をサンドイッチの具のようにしながら、またその先、コンクリートの壁に思い切り激突した。

耳をつんざくような、ひどい衝突音が響いたと思うと、それからあたりはいやに静かになった。

むろんその事故を、僕含め数人が目撃したけど、誰も口を開くことはしなかった。ただ、静かに事故現場を眺めていた。

事故現場もまた静かだった。

鉄くずはフロントまわりの欠損がひどく、ピラーが完全に歪んでいる。文字どおりスクラップだった。

コンクリートの壁には、それなりに厚さのある、放射状のヒビが大きく入っていた。中心は深く陥没している。

そして鉄くずのボンネットにすがりつくようにして、女は立っていた。いまだ整ったままの顔は感情を映すことなく、瞼だけを薄く見開いている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7611y/>

The uncanny valley of artificial intelligence

2011年11月27日23時03分発行